暗い絵の構図

――アウグスティヌス『神の国』二二・二二―二四における悪の問題――

荒井洋一

一　はじめに

二つのすぐれた先行研究が、私の、このたびの、ささやかな研究に生き生きとした発端を与えてくれた。以下、敬称を略す。

加藤信朗「アウグスティヌスの聖書解釈をめぐって――『神の国』からの視点」『パトリスティカ』第七号、新世社、二〇〇三年。

宮谷宣史「人間と悪」『アウグスティヌスの神学』教文館、二〇〇五年。

加藤信朗の論文により、『神の国』の全体構想に関してばかりでなく、悪の問題に関しても教えられた。論文からは本文中に引用する。

宮谷宣史の研究の意義は自身によりはっきりと主張されている。すなわち、アウグスティヌスにおける悪の問題を論じるにあたり、洋の内外を問わず、これまでは、必ずしも十分には注目されてこなかった『神の国』の第二二巻二二章以下に焦点を合わせつつ、このテーマに関する研究上での新しい局面[1]を切り開こうとする試みとして、それは意義付けられている。

私は加藤信朗と宮谷宣史の論文に教えられつつ、『神の

国』第二二巻二二章から二四章までの範囲に焦点を合わせて、読解に取り組んだ。その際、時には、テキストの迷路のような小道にも分け入ってみた。

テキストおよび章、節の分け方は以下に従う。B. Dombart; A. Kalb, Bibliotheca Teubneriana, Editio Quinta, Stuttgart 1981. なお、Corpus Christianorum Series Latina XLVIII, 1955. と La Cité de Dieu, Oeuvres de saint Augustin 37, Desclée de Brouwer, 1960 は共にそれの第4版に従い、後者は節にアラビア数字を付けている。

二　全体の構図

これは、みずからに迫り来る死を目前にしたアウグスティヌスの最晩年の言葉の世界であり、人類全体への遺言のような性格を持つ。（研究者の間には、アウグスティヌスの晩年の著作は退屈との説もあるが、私はそのような立場はとらない）。このテキストを再読しているうちに、まるで、一連の壮大な暗い絵と明るい絵とを、重ね合わせて見ているような気がしてくる。私のこの研究は「暗い絵」の構図を明らかにしようとする試みである。

「暗い絵」[2]とは、この生における「悪の数々」mala、「この生の悪の数々」mala huius uitae（『神の国』二二・二三）――複数形に注意――を描く絵であり、「明るい絵」[3]とは、この生における「善の数々」bona――複数形に注意――を描く絵である。

この範囲内において、テキストには実にしばしば名詞の複数形が使用されるので、極力、ラテン語を引用した。これは左に述べる【列挙】とも密接に関連することであるが、複数性はきわめて明白な特色である。そのことをもっとはっきりと指示してくれるのは、左で詳しく述べる一連の言い回しである。

アウグスティヌスのテキストには「対置する」という用語が用いられている箇所がある。私たちが持って産まれてくる「暗闇の衝動(impetus)に反対して、禁止(prohibitio)と教え(eruditio)は対置(opponere)されている」（『神の国』二二・二二・二）。もしかして、「暗い絵」と「明るい絵」とは、ほぼコントラストをなすように描かれていて、「対置」されていると言うことができるのだろうか。[4]

それとも、ただ単に対置されているだけではなく、あた

かも絵巻物のように、初めは最も「暗い絵」を見せておいてから、しだいに光の要素を加えていって、gradationのように、最後に最も「明るい絵」を見せようとするのだろうか。けれども、最後の「明るい絵」にも「暗い絵」の影は落ちているのであるから――「これらすべては、悲惨な者たち(miseri)、断罪された者たち(damnati)のための慰めの数々(solacia)であって、決して至福な者たち(beati)のための報いの数々(praemia)ではない」(『神の国』二二・二四・五)――、「暗い絵」は、そこでも、決して完全には拭い去られているわけではない。すると、最後の「明るい絵」は最初の「暗い絵」の上に重ねて描かれているというべきだろうか。

とりあえずは、対比または【反転】との表象を用いる。「暗い絵」と「明るい絵」を眺めようとするとき、最も直接的には、「暗い絵」においては、「悪の数々」malaを、「明るい絵」においては、「善の数々」bonaを、アウグスティヌスがよどみなく列挙していく場面が注目される。すなわち、「暗い絵」にはおよそ三箇所、「明るい絵」にもおよそ三箇所、アウグスティヌスが、まるで言葉が彼の心の泉から自然に流れ出るのにまかせるかのように、印象深く、数多く、次々に列挙していく場面がある。それこそ、まるで絵のようである。私はそれらに、以下のようなラベルを貼ってみた。【暗い絵の中の列挙Ⅰ】:『神の国』二二・二二・一、【暗い絵の中の列挙Ⅱ】:『神の国』二二・二二・三、【暗い絵(の中の列挙Ⅲ)】:『神の国』二二・二三、【明るい絵の中の列挙Ⅰ】:『神の国』二二・二四・三、【明るい絵(の中の列挙Ⅱ)】:『神の国』二二・二四・四、【明るい絵の中の列挙Ⅲ】:『神の国』二二・二四・五。

以上のうち、カッコを付したものについては、他の列挙と同じ意味での列挙と呼んでよいかどうか不分明な要素を含む。それぞれについての理由は左に述べる。

【暗い絵の中の列挙Ⅰ】がこれからなされようとする冒頭では、「この生(uita)が、もしも生であると言われるべきであるとしたら」という条件がつけられている。【暗い絵の中の列挙Ⅱ】が終えられた直後には、「この悲惨な、あたかも或る種の地獄(inferi)のような生(uita)」と総括されている。

【暗い絵(の中の列挙Ⅲ)】については、宮谷もこれを列挙と解している。この列挙は、アウグスティヌスの規定

(『神の国』二二・二四・一：「悪の数々」の領域への位置づけ) によっても、またアウグスティヌス自身の気(『神の国』二二・二三：「絶え間なく(continuae)徹夜して(uigiliae)、夜通し警戒の目を見張りつつ(excubare)」)においても、間違いなく、「暗い絵」に属しているとは思うが、実は、他の二つの【暗い絵の中の列挙】が共通に持っている特徴を備えていない一面がある。そしてまた、【暗い絵の中の列挙】と【明るい絵の中の列挙】が共通に持っている特徴を備えていない一面もあるので、とらえ方には要注意である。いわば特異な、この【暗い絵(の中の列挙Ⅲ)】について、私は【暗い絵の中の列挙】から【明るい絵の中の列挙】への境界線上に位置づけられるのではないかと考えている。この点については、後に論じる。

他方、【明るい絵の中の列挙Ⅰ】【明るい絵の中の列挙Ⅲ】においては、それぞれに、mirabilisという形容がつけられている。【明るい絵(の中の列挙Ⅱ)】においては、mirusである。ただし、mirabilisについては、列挙以外の場面でも用いられているので、列挙にのみ特有な形容というわけではない。

以上により、「暗い絵」と「明るい絵」とは、いわば、【反転図形】のようになっているのだろうか。

そして、【暗い絵(の中の列挙Ⅲ)】を除いて、また、【明るい絵(の中の列挙Ⅱ)】においては不分明ではあるが、他の四つの列挙を通じて、共通して、「暗い絵」と「明るい絵」の中の列挙は、以下の二つの表示【表示Ⅰ】【表示Ⅱ】によって、列挙であることが明示されている。それぞれの中で、(1)と(2)とは一連の変奏曲のようなものとしてとらえられるが、(3)と(4)に関しては、(3)における「悪の数々」「罰の数々」を「学芸・技芸の数々」「善性」「摂理」「この慰めの数々」に反転させると(4)が導かれると言ってもよいように思う。

【表示Ⅰ】

(1) 【暗い絵の中の列挙Ⅰ】においては、「そしてまた、その他の悪(mala)の数々が何であれ、今は心に思いつかないが、決して人間たちのこの世の生(uita)からは退き去ることがないものはすべて」(『神の国』二二・二二・一)。【暗い絵の中の列挙Ⅱ】においては、「一体、だれが何らかの話(sermo)によってそれらを語り分け(digerere)られようか。一体、だれが何らかの思念(cogitatio)によってそれらをとら

えられようか（conprehendere）」（『神の国』二二・二二・三）。

(2) 【明るい絵の中の列挙Ⅰ】においては、「ことに、もしも私たちが、かいつまんで、すべて［の人間の産業活動］を積み上げようとはせずに、その一々において仔細に語ろうとするなら、一体だれが言い表せ(eloqui)ようか」（『神の国』二二・二四・三）。【明るい絵（の中の列挙Ⅱ）】においては、「覆い隠されたもの、なおかつ、私たちのまなざしから遠く離れたもの――たとえば、血管と神経と内臓とのこれほど大きな（tanta）もつれあい（perplexitas）や生命的なものの秘密など――においては、そのような測りの値の数（numeri mensurarum）を見出すことは誰にもできない」（『神の国』二二・二四・四）。【明るい絵の中の列挙Ⅲ】においては、「これらすべてを一体だれが列挙（commemorare）できようか」（『神の国』二二・二四・五）。

【表示Ⅱ】

(3) 【暗い絵の中の列挙Ⅰ】においては、「これほど多くの、これほど大きな（tot et tanta）悪の数々」（『神の国』二二・二二・一）。【暗い絵の中の列挙Ⅱ】においては、「どんなに多くの、そしてどんなに大きな（quot et quantae）罰の数々（poenae）」（『神の国』二二・二二・三）。

(4) 【明るい絵の中の列挙Ⅰ】においては、「これほど多くの、これほど大きな（tot et tantae）学芸・技芸の数々（artes）」（『神の国』二二・二四・三）。【明るい絵（の中の列挙Ⅱ）】においては、「身体（corpus）それ自身において、どれほど大きな（quanta）神の善性（bonitas）が現われていることだろう。これほど大きな（tantus）創造主（Creator）のどれほど大きな（quanta）摂理（prouidentia）が現われていることだろう。」（『神の国』二二・二四・四）。【明るい絵の中の列挙Ⅲ】においては、「もしも現在のこの慰めの数々（ista=solacia）がこれほど多くの、これほどすばらしい、これほど大きな（tot et talia ac tanta）ものであるとしたら」（『神の国』二二・二四・五）。

(1)と(2)とは変奏曲、(3)と(4)とは【反転】と仮に言い表したが、実は、変奏曲も、【反転】も同じ、一つのことを物語っていると思う。それは、「暗い絵」も「明るい絵」も、

底知れぬ深さと、広大無辺の広がりと、はるかな高さとを前にして、十分には描きつくされえない未完の作品であるということである。

これらは、アウグスティヌスという一人の人が、この世に生まれてから、最晩年に至るまでの間に、聖書の源泉からはもちろん、キケロなどの（ait Tullius: 二二・二二・四）教養の源泉から多くを得つつも、至る所で、直接、目にし、耳にして、心にとどめた事件や事故、災害や病の数々であり、技芸や学芸、景色や情景の数々であろう。

また、再読に再読を重ねているうちに、最晩年にさしかかった、偉大な言葉の巨匠にしかできないことであろう、と気づかされることがいくつかあった。

重苦しく深刻な描写と思索の合い間には、まるで読者にほっと一息つかせてくれるかのような、皮肉な笑いもまたちりばめられている。

たとえば、「暗い絵」の中では、治療の数々や医薬の数々についての皮肉を参照。[5]

また同じ「明るい絵」の中では、「哲学者たち」と「異端者たち」とに対するアウグスティヌスの皮肉も参照。「最後に、自分たちの迷妄の数々（errores）と虚偽の数々（falsitates）とを弁論することにおいてさえ、哲学者たち（philosophi）と異端者たち（haeretici）とはいかに大きな天賦の才の数々（ingenia）をきらめかせるものであるのかを、一体だれが十分に評価できようか」（『神の国』二二・二四・三）。これは「明るい絵」の中に、「哲学者たち」と「異端者たち」が落とす小さな暗い影をそっと忍び込ませたものであろう。

この二二・二四・三に、皮肉な表現が連発されているのはなぜか。それは、ここでは、光と影とが交錯しているからであろう。そもそも皮肉というものは、光と影、善と悪とが交錯する領域において成立するものである。[6]

「悪の数々（mala）」を描く「暗い絵」と、「善の数々（bona）」を描く「明るい絵」とを分ける、二二・二二―二四における分水嶺は二三と二四との間にある。アウグスティヌス自身による規定はこうである。

「私たちが、当面、目指したところに照らすと、悪の数々（mala）については――そのうちの一つは、私たちの向こう見ず（audacia）から生じる罪（peccatum）であり、もう一つは神の裁き（iudicium Dei）から生じる罰（supplicium）である――その両者について、私たちはすでに

十分に述べた。今や、神の善の数々（bona）について――神は善の数々を悪徳・不全によってそこなわれ（uitiata）、断罪された（damnata）自然本性（natura）にも授けたのであり、今に至るまでも授けているのである――私は述べようと企画した」（『神の国』二二・二四・一）。

三　それぞれの場面

◎『神の国』二二・二二・一は、大きな、暗い背景の中に、さらに暗い者たちが描かれた、暗い絵である。無差別な暗さ【焦点Ⅰ】の中に、より一層暗い者たち【焦点Ⅱ】が暗躍している。「無差別的な暗さ」は生の全体を覆いつくしている。「この生（uita）が、もしも生であると言われるべきであるとしたら」とさえ冒頭から述べられている。この絵の暗さは「悪」からやってくる。すなわち「この生（uita）がこれほど多くの、これほど大きな（tot et tanta）悪の数々（mala）によって満たされている（tot et tantis malis plena）」ということからやってくるのである。それは人間全体が断罪された（damnatus）結果である。ここには、人間全体の断罪後の、罰としての悪の諸相がある。一枚目の「暗い絵」の焦点は二つであると思う。一つ目の焦点【焦点Ⅰ】は人間全体の共通性（人類）に合わせられているが、その暗い絵を見つめていくと、おのずから二つ目の焦点【焦点Ⅱ】に導かれて、より一層暗い者たち（「悪しき人間たち」homines mali）の「なす悪」を網羅的に見せられることになる。

宮谷が「まず第一に、具体的に論じている点」として挙げている箇所は、『神の国』二二・二二・一の次のテキストである。私の研究発表の論旨に合わせるために、ほんの少しだけやむをえず引用範囲を増やしたり、泉治典の訳語ないし訳文を一部変更したことをお許しいただきたい。

【暗い絵の中の列挙Ⅰ】：『神の国』二二・二二・一

この列挙は単語による列挙である。おそらく焦点は「なす悪」【焦点Ⅱ】とその「根元」【焦点Ⅰ】に合わせられているであろう。

「この愛から生じるのは、身をさいなむ心配（mordaces curae）、惑乱（perturbationes）、嘆き（maerores）、慄き（formidines）、狂気の喜び（insania gaudia）、不和（discordiae）、訴訟（lites）、戦い（bella）、策略（insidiae）、怒り（iracundiae）、敵対、欺瞞（fallacia）、おもねり、

詐欺、嘆き、盗み（furtum）、掠奪（rapina）、不誠実、高慢（superbia）、野心、ねたみ（inuidentia）、人殺し（homicidia）[7]、父親殺し、残酷、狂暴、不正、飽食、無遠慮、無思慮、恥知らず、淫乱、姦淫（adulteria）、近親相姦、そして男女の不自然な性交（それはあまりに不潔すぎて、その名を言うことがはばかられる）であり、さらに聖物窃取（sacrilegia）、異端、冒瀆、偽誓（periuria）、無実な者への圧力（oppressio）、否認、ごまかし、法を曲げること、偽証、不当な判決（iniqua iudicia）、暴行（uiolentiae）……そしてまた、その他の悪（mala）の数々が何であれ、今は心に思いつかないが、決して人間たちのこの世の生（uita）からは退き去ることがないものはすべて。これらは、確かに、悪しき人間たち（homines mali）に属するものではあるが［非共通性］【焦点Ⅱ】、アダムのあらゆる子が持って生まれてくる迷妄（error）の根元（radix）、倒錯した愛（amor peruersus）の根元から由来するものである［共通性］【焦点Ⅰ】」。

◎『神の国』二二・二二・二では全体的な暗さの中に、少しの光が差し込んでいる。というのは、ここでは、次の二二・二二・三の冒頭の言葉から二の内容を逆に推測してみると、「年長の者たち」maiores による「年少の者たちへの罰」poenae pueriles を用いる子供たち（paruuli）の学び（discere）に焦点が合わせられているからである。

◎『神の国』二二・二二・三は、やはり、大きな、暗い絵である。見方によれば「最も暗い場面を含む絵」とも言えよう。ここには、家族の間での人肉食までが出てきているからである。次の四の冒頭で、「この悲惨な（misera）、あたかも或る種の地獄（inferi）のような生（uita）」と言われているゆえんである。けれども、「最も暗い場面を含む絵」とはいえ、それは決して、より一層暗い者たち【焦点Ⅱ】の「なす悪」の場面ではなく、人間全体【焦点Ⅰ】の「こうむる悪」の場面であることに注意しなければならない。

【暗い絵の中の列挙Ⅱ】：『神の国』二二・二二・三

この列挙は、罰としての「こうむる悪」（道徳的な悪、自然的な悪）の列挙であると考えられる。一般に「悪」は二分されて、人の「なす悪」と人の「こうむる悪」とに分けられるが、ここでは人の「こうむる悪」がテーマになっている、と言うことができよう。「人が人を食べるために殺す」という最悪の事態についても、実は、「なす悪」の

視点からではなく、「こうむる悪」の視点から語られている。人の「こうむる悪」は、さらに三分されていると考えられる。私はこのテキストを(1)(2)(3)と三区分する。

(1) 「人と人とのかかわりの中でこうむる悪」。または「或る人がなす悪を別の人がこうむる際の悪」（道徳的な悪）。ここでは「恐怖」metus や「災難」calamitas と言われたり、「多くのおそるべきこと」multa horrenda と言われたりしている。

(2) 「外から（forinsecus）やって来て、身体（corpus）を脅かす（formidare）無数の不慮の災難（casus）としての悪」。これらは「自然的な悪」と言ってもよいだろう。日本語では、「悪」と言うよりも、「災い」に近い。「航行する人々はいかなる災い（mala）をこうむる（patiuntur）ことだろう。陸路をたどる人々はいかなる災いをこうむることだろうか」。

(3) ダイモーンの攻撃の結果生じる苦しみとしての悪。身体それ自身の中から出現する病の悪の数々（mala morborum）（自然的な悪）。その悪は身体も、魂（anima）も、感覚（sensus）も、内側から脅かす。

アウグスティヌスの『神の国』二二・二二―二四において、「暗い絵」の中には、たとえ「最も暗い絵」の中にさえ、決して、たとえば「悪魔」が登場して、暗闇の帝王のような役割をはたしてはいないようである。[8]

◎『神の国』二二・二二・四では、三の「最も暗い絵」の後に、一見すると、一条の強力な光が差し込んでいるように見える。それは救い主・イエス・キリストである。それにもかかわらず、ここではキリスト者のみのための救いが主要なテーマとして語られるのではなく、実は、依然として、人間の全体像［共通性］＝「人類」の姿【焦点Ⅰ】が描かれるのである。

◎『神の国』二二・二三は、「正しい者たち」の落とす影が強調された、「暗い絵」である。この絵の暗さは、絵の全体を無差別に覆いつくすような暗さの中で、いわばシルエットのように、光が浮かび上がってくるような暗さであると言ったらよいだろうか。それとも、全体としての暗さを背景にして、「正しい者たち」の落とす影が輝いていると言ったらよいだろうか。これまで描かれてきた「大きな暗い絵」【焦点Ⅰ】が塗り替えられて、無効になるというのではない。むしろ、その大きな暗い絵を背景にして描かれる、「固有の暗い絵」【焦点Ⅲ】であり、全体的な暗さ

の中で、「正しい者たち」がなすべき善の数々が描かれる「暗い絵」である。

けれども、そこにはすでに光がひそかに差し込んでいると思う。ここでの「暗い絵」とは、実は、光と影とが交錯する絵ではないだろうか。

ここで主題的に描かれるのは、もはや人間の全体像[共通性]【焦点Ⅰ】の在り方ではない。ここでは、人間を大きく二分して、一方で、「悪人たち」homines malimali「不正な者たち」iniqui【焦点Ⅱ】を分け、他方で、「善人たち」boni「正しい者たち」iusti【焦点Ⅲ】を分けた上で、「正しい者たち」iusti の方の在り方が描き分けられる。

これまで語られてきた「この生の悪の数々」mala huius uitae は「善人にも悪人にも共通する悪の数々」mala bonis malisque communia であったが、ここでは「正しい者たち」が持つ「固有の労苦の数々」labores proprii が語られようとする。「正しい者たち」は「善人にも悪人にも共通する悪の数々」mala bonis malisque communia を持つばかりでなく、それに加えて、「正しい者たち」のみに固有な「労苦の数々」labores をも持つのである。

「正しい者たちは労苦を持って悪徳に対する（aduersus uitia）兵役に服する（militare）のであり、このような戦闘（proelia）の試練の数々（temptationes）と危険の数々（pericula）の中にさらされるのである」。

この「戦闘」は対他的な側面も持つであろうが、テキストでは、むしろ、対自的な側面が強調されている。それを内なる戦闘と言ったらよいだろうか。

「肉（caro）は霊（spiritus）に対立して欲情すること（concupiscere）をやめないし、霊は肉に対立することをやめないので、その結果として、私たちは、決して、あらゆる悪しき欲情（concupiscentia mala）を滅ぼしつくすことによって、私たちが意志する（uolumus）ことをなす（facere）、などということにはならないが、神の助けを得て、私たちに可能な限り、悪しき欲情に同意（consentire）しないことによって、悪しき欲情を私たち自身に従属させる（subdere）べきなのである。絶え間なく（continuae）徹夜して（uigiliae）、夜通し警戒の目を見張りつつ（excubare）」（『神の国』二二一・二三）。

ここから否定の命法による列挙が始まる。

「絶え間なく（continuae）徹夜して（uigiliae）、夜通し警戒の目を見張りつつ（excubare）」には十分注意すべ

きである。アウグスティヌスの気分において、ここはまだ「夜の世界」であるということが、この言葉遣いに反映されている。

アウグスティヌスの文章は流れるように続いていて、途中で切ることが難しいが、紙面の関係で、あえて断片的に引用する。

【暗い絵（の中の列挙Ⅲ）】：『神の国』二二・二三

この列挙には、前述したように、他のすべての列挙と比べると、きわめて特異な面がある。この特異性については、後に論じる。この列挙は否定の命法による列挙である。それは「悪をなさないように」との命法であるが、最後に、「善をなすように」との肯定的な命法に転じる。これは、最後の命法を除くと、道徳的な悪の否定の命法の列挙であると言ってもよいだろう。

「絶え間なく（continuae）徹夜して（uigiliae）、夜通し警戒の目を見張りつつ（excubare）。真に似た憶見（opinio）が私たちを欺かないようにと、狡猾な話（sermo）が私たちを惑わさないようにと、何か或る迷妄（error）の闇（tenebrae）が私たちを包ま（offundere）ないようにと……私たちの怒りの上に日（sol）が暮れてはいかないようにと（参照、エフェ四・二六）、敵意が私たちを呼び起こして、悪には悪の報復へと導くことのないようにと（参照、ロマ一二・一七）、……私たちの手足が不正の道具として罪に譲り渡されないようにと（参照、ロマ六・一二―一三）、……露骨な、または慎みのない言葉に喜んで耳を傾けないようにと、喜ばしいものであるにせよ、許されないこと（quod non licet etiamsi libet）をなさないようにと」

ここで手短で簡潔な列挙の数々は終わり、少し長文の列挙のクライマックスに至る。ここでの、短文から長文への移行は要注意である。

すなわち「この労苦の数々（labores）と危険の数々（pericula）に満ち満ちた戦い（bellum）の中で、いつか、私たちの力（uires）によって勝利（uictoria）が達成されるはずなどと希望（sperare）されないようにと、そしてまた、達成された暁にも、決して、私たちの力に勝利が帰せ（tribuere）られないようにと。そうではなく（sed）、勝利は神の――その神について使徒パウロは次のように言う。すなわち「私たちの主、イエス・キリストを通して、私たちに勝利を与える神に感謝せよ（gratias Deo）」（Ⅰコリ一五・五七）。また使徒パウロは他の箇所でも言う。

すなわち、「私たちをいつくしんだ（dilexit）方を通して、私たちは、これらすべてのことにおいて、圧勝を収める（superuincimus）」（ロマ八・三七）――恩寵（gratia）に帰せられるべきである」（『神の国』二二・二三）。

この最後の一文に注目すべきである。「私たちの力に勝利が帰せられないようにと（ne... uiribus nostris facta tribuatur）」までが、延々と続く、否定の命法（ne...ne..., ne...）による列挙の数々である。そして、最後の一文のみは肯定の命法（sed...）によっている。「勝利は神の――その神について使徒パウロは次のように言う（Ⅰコリ一五・五七）（ロマ八・三七）……――恩寵（gratia）に帰せられるべきである」。

延々と列挙される短文による否定の命法の数々から比較的に長文による否定の命法へ、そして長文による否定の命法から肯定の命法へと、使徒パウロの言葉とも見事に共鳴しつつ、まことにドラマティックに続く。

『神の国』二二・二二一二四までの範囲内で、クライマックス的な構文を持つのはここだけである。そしてまた、この列挙のみには、他のすべての列挙が共通に持つ二つの表示【表示Ⅰ】【表示Ⅱ】が、どこにも見当たらない。

それはなぜか。

それは、この【暗い絵（の中の列挙Ⅲ）】：『神の国』二二・二三においてこそ、アウグスティヌスその人がいるからではないか。他のすべての列挙の場面では、アウグスティヌスは、まさに絵のように見て、描いているのに対して、この【暗い絵（の中の列挙Ⅲ）】のみは、実は、絵ではなく、ここでは、アウグスティヌスはみずからの生（uita）を、自画像のように描いているというよりも、生き生きと語っているのではないかと私は思う。

その意味では、ここにこそ、『神の国』二二・二二一二四の範囲内での中心があるとも言える。アウグスティヌスは、ここを中心にして、「暗い絵」を回顧して描き、「明るい絵」を展望して描いているのではないか。

そのことを傍証するのは

(1) 「列挙の中の主語または主格」の特徴

(2) 列挙であることを、ト書きのように、語る【表示Ⅰ】の不在

(3) パウロと福音書の集中的な引用や参照、である。

【表示Ⅰ】が、この【暗い絵（の中の列挙Ⅲ）】においてのみ、見当たらないことついては前述したので、ここでは

繰り返さない。

ここでは、(1)と(3)について記す。

まず、(1)について、それぞれの列挙における主語ないし主格について調べてみよう。

【暗い絵の中の列挙Ⅰ】は一般的な名詞の列挙である。「恐るべき無知の深淵が」horrenda profunditas ignorantiae「あらゆる迷妄が」error「人は」homo「愛（amor）それ自身は」「この愛から生じるのは、身をさいなむ心配（mordaces curae）、惑乱（perturbationes）、嘆き（maerores）……」。【暗い絵の中の列挙Ⅱ】では「人類は」genus humanum「恐怖（metus）や悲嘆（calamitas）は」「海を行く人、陸地を旅する人は」「人間たちは」homines「母たちは」matres。【明るい絵の中の列挙Ⅰ】では「人間の産業活動は」industria humana。【明るい絵（の中の列挙Ⅱ）】では「神の善性が」bonitas「創造主の摂理が」prouidentia「動物たちは」animalia「人は」homo。【明るい絵の中の列挙Ⅲ】では「美しさと有用性は」pulchritudo et utilitas「食べ物は（何と）豊富に」ciborum copia「味わいは（何と）多様で」saporum diuersitas「健康の手立てが」salutis auxilia「何と大いなる素材が」quanta materies。

ところが、【暗い絵（の中の列挙Ⅲ）】では、否定の命法を導いていく文章において、明確に、主語として「正しい者たちは」iusti と共に、一人称複数形「私たちは」「私たちが」（uolumus; faciamus; possumus; subdamus）が用いられている。また、主語ではないにせよ、否定の命法それ自身においても、「私たちについての」de nobis や「私たちを」nos、「私たちの」noster が使用されていて、焦点ははっきりと「私たち」に合わせられている。

次に、(3)について、それぞれの列挙における聖書の集中的な引用や参照について調べてみると、この【暗い絵（の中の列挙Ⅲ）】においてのみ、パウロと福音書の集中的な引用や参照が認められる。しかも、その引用に際しては、一人称複数形に関して、右記(1)と見事に調和している。参照、「私たちは圧勝を収める（superuincimus）」（ロマ八・三七）

「正しい者たち」iusti についても一言する。これは、恐らく、次の福音書の文脈が想定されているのではないだろうか。「その時、正しい者たちは彼らの父の国で太陽のように輝くだろう」（Tunc iusti fulgebunt sicut sol in

regno patris eorum: マタ一三・四三)。これは毒麦のたとえ(parabola)の箇所である。そこでは、「良い種をまく者」はイエスであり、「畑」は世界であり、「良い種」は御国の子らであり、「毒麦」は悪い者の子らであり、「刈り入れ」は世の終わりであるとされる。この一文を含む長い引用は『神の国』二〇・五・二で実際になされている。

「それにもかかわらず、私たちは、たとえ、どんなに大きな戦闘のための勇気(uirtus proeliandi)を持って、悪徳の数々(uitia)と抗争する(repugnare)にせよ、さらにまた、ついには悪徳の数々を克服して、くびきのもとにつないでも、私たちがこの身体(corpus)において在る限りは、神に向かって「私たちの債務(debita)を私たちに免除して(dimittere)ください」(マタ六・一二)と言わずにいる理由などはありえない、ということを知らねばならないのである。けれども、私たちが常に、不可死的な身体(corpora inmortalia)と共にあるであろうところの、あの国(regnum)においては、私たちには、いかなる戦闘(proelia)も債務もないであろう。この戦闘や債務は、もしも私たちの本性(natura)が、創られたままの正しい姿で(recta creata)持続しているとすれば、[この国においても]どこにも、決してないであろうに。そして、それゆえに、私たちのこの相克(conflictus)もまた――その相克の中において私たちは危険にされされており、その相克から最終的な勝利によって解放されること(liberari)を私たちは望んでいるのであるが――この生の悪の数々(mala uitae huius)に属しているのである。この生が断罪された(damnata)ということを、私たちは、これほど多くの、これほど大きな(tot tantaque)悪の数々(mala)の証言によって、明らかに示す(probare)」(『神の国』二二・二三)。

この最後の一文こそは、重要である。それは、この『神の国』二二・二三に至って、ついに、『神の国』二二・二二・一以来の暗い絵の構図が終わりを告げていることを示している。というのは、この一文を読み返していると、『神の国』二二・二二・一の冒頭の一文が、二重写しのように、はっきりとよみがえってくるからである。

「私たちの第一の原初(prima origo)に関しては、そのあらゆる子孫が断罪された(progenies damnata)ということは、この生(uita)がこれほど多くの、これほど大きな(tot et tanta)悪の数々(mala)によって満た

されていることにより証されている」（『神の国』二二・二二・一）。

『神の国』二二・二二・一と『神の国』二二・二三では、『神の国』第二二巻において、要所要所で用いられる言い回し：「これほど多くの、これほど大きな（tot et tanta）」が明確にこだましている。この言い回しは、あたかも額縁のように、「暗い絵」の最初と最後を見る者に対して指し示している。

◎『神の国』二二・二四・一は大きな、明るい絵【焦点Ⅰ】である。すなわち、ここから、神の「善性」bonitas や神の与えた「善の数々」bona が考察される。

◎『神の国』二二・二四・二は引き続き「明るい絵」【焦点Ⅰ】である。

二つの善である「繁殖（propagatio）と同一形成（conformatio）」について、語られている。

◎『神の国』二二・二四・三は、依然として、大きな、明るい絵【焦点Ⅰ】である。すなわち、神の「善性」bonitas や神の与えた「善の数々」bona から出発している。ここでは、まだ、人間の全体像「共通性」が描かれる。

「暗い絵」においては、人間の成長過程が、影の側から、見つめられていた。すなわち「真理についての無知」は「すでに幼児たち（infantes）において明らかである」。「空しい欲望」は「少年たち（pueri）において現われ始める」（『神の国』二二・二二・一）というように。「明るい絵」においては、人間の成長過程が、まるで【反転】のようにして、光の側から、見つめられている。すなわち「精神において、理性（ratio）と知性（intellegentia）とは、幼児（infans）においては、或るしかたで、いまだまどろまされていて（sopita）、まるで全然実在していないかのようであるが、年齢が進むにつれて、知識（scientia）と教え（doctrina）を受け入れる（capax）ことができるようになり、真理（ueritas）をとらえ（perceptio）、善（bonum）を愛する（amor）ことに適合する（habilis）ものになるようにと、目ざまされ、進展させられるべきものとしてある」というように。

アウグスティヌスのテキストには、先述したように、「対置する」という用語が用いられている箇所がある。人間の成長過程は、まずは「暗い絵」において、影の側から、negative に描かれ、ついで「明るい絵」において、光の側から、positive に描かれて、「対置」されていると言う

ことができよう。

【明るい絵の中の列挙Ⅰ】：『神の国』二二・二四・三

この列挙は人間の生産的な営為の列挙である。これは「なす善」（自然的な善）の列挙であると言っても良いだろう。ここにはアウグスティヌスの皮肉の連発が認められる。それは光の中に、影が――すなわち、「無知」と「空しいもの、同時にまた有害なものへの愛」とに由来する悪が――描かれている、ということである。[9]

◎【明るい絵（の中の列挙Ⅱ）】：『神の国』二二・二四・四【焦点Ⅰ】

この列挙は「身体においてこうむる善」（自然的な善）の列挙である。ただし、テキストに見るように、「どれほど大きな（quanta）」や「これほど大きな（tantus）」はあるが、多数性を示す表現、たとえば「これほど多くの（tot）」がないので、列挙や枚挙かどうかが不分明である。ここでは多数性よりも、むしろ「大きさ」や「深さ」が問題となっているようにも見える。

◎『神の国』二二・二四・五では、最後の、すばらしい「明るい絵」【焦点Ⅰ（＋Ⅲ）】が描かれる。この、すばらしい「明るい絵」を眺めていると、まるで天地創造の日に立ち返っているかのような、不思議な感じがしてくる。けれども、振り返ってみれば、【明るい絵の中の列挙Ⅰ】でも、【明るい絵（の中の列挙Ⅱ）】でも、そしてこの【明るい絵の中の列挙Ⅲ】でも、力点は、はっきりと、神による天地創造に置かれていることは間違いない。[10]

ここでは、あたかも、世界全体が輝いているかのようである。それは存在の輝き、生命の輝きに似ている。それは人に与えられた「慰めの数々」solacia としての「善の数々」（自然的な善）である。

ここに描かれた絵は、いつしか最晩年に到達した老いたる巨匠の目に映る、平凡で退屈な風景画の数々などでは決してなく、日々の生活の、一見、ありふれた風景や光景、情景の中に潜む、世界の原初の輝きが、透徹したまなざしによって見事に捉えられ、描かれた絵の数々であると言っても過言ではないだろう。

それとも、それは、あんなにも「暗い絵」を描くことのできた人にだけ描けるような「明るい絵」であると言ったらよいのだろうか。あるいはまた、生き地獄から生還した人だけが描くことのできる、世界についての「明るい讃美の絵」とでも。もしくは、みずからに迫り来る死期を悟っ

た人だけが描くことのできる「最後の明るい希望の絵」と。

いや、むしろ、その反対に、加齢と共に熟成し、深く豊かに成長していく信仰と知恵に生きる、聖なる人にだけ、時として、かいま見える天地創造の世界と言うべきではないだろうか。

それは、また他方、まるで、明日は旅立つ人が、これまでたどってきた長い旅路の風景を、微笑と共に、なつかしく振り返る言葉でもあるかのような意味深い、味わい深い、含蓄の深い響きに満ち満ちているような気もする。

【明るい絵の中の列挙Ⅲ】：『神の国』二二・二四・五

この列挙は被造物（creatura）のその他の［身体以外の］美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）の列挙である。これは自然的な善の列挙であるといってもよいだろう。

「今や、被造物（creatura）のその他の美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）については――人は、たとえ、このような労苦の数々（labores）と悲惨の数々（miseriae）の中へと投げ出され、断罪されたとはいえ、神の寛大さ（largitas diuina）により、この美しさと有用生とを眺めたり、利用したりすることが許されたのである――、どんな風に話せば（quo sermone）、その輪郭を描くことができよう。

被造物（creatura）のその他の美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）は見て取られる。天と地と海の千変万化の美しさ（pulchritudo）において、太陽と月と星のあふれるほどの光（lux）それ自身とあんなにも驚くべき（mirabilis）光景（species）において、うっそうと茂る木々の陰において、咲きほこる花の色と香りにおいて、多くの、さまざまな鳥たちのさえずりと色彩において、これほど多くの、これほど大きな（tot et tantae）生き物たち（animantes）の種の多様性において――そのうちでより一層大きな驚異（admiratio）の的であるのは、決して巨体の持ち主ではない。というのは、私たちは、蟻の業や蜂の業の数々に対して、鯨の巨大な体に対してよりも大きな驚嘆の念を覚える（stupere）からである――、あたかもさまざまな色の衣装を身にまとうようにして、或る時は緑でありつつも、時々刻々と濃淡を変え、或る時は紫の、また或る時は紺碧の姿を見せる海（mare）自身のこれほど壮大な光景（spectaculum）においても。さらにまた、海が荒れ狂う折の景色すら、何と面白く眺められることだろう。それがより一層の甘美さ（suauitas）をかもし出す

のは、みずからが投げ飛ばされたり、揺り動かされたりする船乗りの立場でではなく、眺める者の立場で魅了されるからである。

飢餓に対抗して、食べ物は、至る所に、何と豊富にあることだろう。嫌気に対抗して、味わいは何と多様であることだろう。それは、自然の豊饒によって注ぎ出された多様性（diuersitas）であり、決して、料理人の技芸と労苦によって求められた多様性ではない。何と多くの物において、健康を維持し、回復する手立てがあることだろう。かわるがわるに訪れる昼と夜の交替の何と快いことか。涼しい風（aurae）の何と心地よいことか。植物の実と動物においては、衣服を織り成すための何と大いなる素材（materies）があることだろう。これらすべてを一体だれが列挙（commemorare）できようか。

……そして、これらすべては、悲惨な者たち（miseri）、断罪された者たち（damnati）のための慰めの数々（solacia）であって、決して至福な者たち（beati）のための報いの数々（praemia）ではない。

したがって、もしも現在のこの慰めの数々（ista）がこれほど多くの、これほどすばらしい、これほど大きな（tot et talia ac tanta）ものであるとしたら、あの報いの数々（illa）はどれほどのものであろうか」。

あたかも額縁のように、「暗い絵」の最初と最後を見る者に対して指し示していた言い回し：「これほど多くの、これほど大きな（tot et tanta）」が思い浮かぶ。それは「明るい絵」においても、その最初と最後を見る者に対してはっきりと指し示している。

そして、最後の後に何が来るのか。

【明るい絵の中の列挙Ⅲ】の最後に、「これらすべては、悲惨な者たち（miseri）、断罪された者たち（damnati）のための慰めの数々（solacia）であって、決して至福な者たち（beati）のための報いの数々（praemia）ではない」と明言されている。そして、それに続いて、「もしも現在のこの慰めの数々（ista）がこれほど多くの、これほどすばらしい、これほど大きな（tot et talia ac tanta）ものであるとしたら、あの報いの数々（illa）はどれほどのものであろうか」とも。

アウグスティヌスは、このようにして、【明るい絵の中の列挙Ⅲ】を描くことによって、かえって、暗黙のうちに、「至福な者たち（beati）のための報いの数々（praemia）」

がいかなるものであるのかを、すなわち、この『神の国』第二二巻の冒頭において約束されていた「神の国の永遠の至福」ciuitatis Dei aeterna beatitudo がいかなるものであるのかをはるかに遠望していると言ってもよいのではないだろうか。

「暗い絵」の中の「慰めの数々（solacia）」（「聖なる物の数々（sancta）や聖なる者たち（sancti）を通じて、癒しの大いなる慰めの数々（solacia）が存在している」）から「明るい絵」の中の「慰めの数々（solacia）」へと、このようにして、反転し、さらにまた、「明るい絵」の中の中の「慰めの数々（solacia）」から「至福な者たち（beati）のための報いの数々（praemia）」へと読者の視線が反転していくようにと願って、アウグスティヌスは言葉の絵筆を駆使しているのではないだろうか。

この「至福な者たち（beati）のための」は、第二二巻冒頭の言葉を思い起こさせる。そこでは、この最終巻の内容は「神の国の永遠の至福」ciuitatis Dei aeterna beatitudo についてになるだろうと予告されていた。その約束の一部がここで果たされたのだろうか。すなわち、「神の国の永遠の至福」の一端がここで示されているのだろうか。

アウグスティヌスが五九歳（四一三年）の頃に書き始められたとされる大著『神の国』の最終巻である第二二巻が完成されるのはその死の三年前、七二歳（四二七年）の頃である。私が読解に取り組んだ『神の国』二二・二二―二四は、その最終ページ二二・三〇の直前と言ってよい重要な位置を占める。身体の復活の問題（二二・二一）と問題（二二・二五）との間に挿入された「暗い絵」と「明るい絵」の数々は見る者、読む者に深い印象を残すが、思えば、なぜここに挿入されたのだろう。まるで、在りと在らゆる物の、また生きとし生ける者の存在と生の諸相が、二二・二三を中心にして、わずか数ページのうちに、暗と明とに一挙に総覧されているかのようである。ここには全世界の明暗の相貌があると見える。ただし、そこでは、私たちがふだん見慣れた世界が、あたかも磨きぬかれたプリズムを通過する光のように、最晩年のアウグスティヌスの透徹した目によって見られて、見事なスペクトルに分光された上で、明らかに示されているのではないだろうか。

註

(1) その新しい局面とは、アウグスティヌスが悪の問題について、『神の国』第一二巻二二章以下では「まず第一に、具体的に論じている点」に注目し、それを明らかに示すことであり、第二には、「その悪をどうしたら克服できるのか、についても議論を展開している」点に注目し、それを明らかに示すことである。

(2) 「暗い絵」においては、「暗いふところ(sinus tenebrosus)」(二二・二二・一)という表現が、実際、用いられているし、「暗闇(tenebrae)」(二二・二二・二)という表現も用いられている。

(3) 「明るい絵」においては、「理性(ratio)の、或る、いわば閃光(scintilla)」(『神の国』二二・二四・二)という表現が、実際、用いられているし、「太陽と月と星のあふれるほどの光(lux)それ自身とあんなにも驚くべき(mirabilis)光景(species)」(二二・二四・五)という表現も用いられている。

(4) 参照、『神の国』一一・一八:「神は、天使たちの場合は言うまでもなく、人間たちの場合も、いずれ未来に悪しき者になるであろうと予知していた者のうちの一人も創造することなどないであろう。もしも、どのようにすれば、彼らを、善き者たちの効用のために、等しく、資することができるのかを神がわきまえているのではないとしたら。そしてまた、同時に、世々の秩序を、いわば、或る種の対置(antitheta)から導かれるところの、あたかも、最も美しい詩歌(pulcherrimum carmen)のようにして、神が飾るすべをわきまえているのではないとしたら。ここで対置と呼ばれているところのものは、言表(elocutio)を飾るものとしては、最も麗しい(decentissima)ものであり、ラテン語では対置(opposita)と呼ばれるが、もっとはっきり言えば、反対置(contraposita)である。……それゆえ、このような反対するものに対置された反対するものが話し方の美(sermonis pulchritudo)を提供するのと同じように、今度は、言葉の雄弁がではなく、事柄の或る雄弁(eloquentia)こそが、すなわち、反対する事柄の対置(oppositio)こそが、この世の美(saeculi pulchritudo)を構成するのである」。

(5) 「身体それ自身からもこれほど多くの(tot)病の悪の数々(mala morborum)が出現するので、その結果、その全部を医学書に収めることはできないほどである。しかもその多くにおいて、いや大部分において、治療の数々(adiumenta)や医薬の数々(medicamenta)自身が苦痛であり、そのため人間たちは[罰としての]責め苦の死滅から(a poenarum exitio)[罰としての]責め苦の治療の手立てによって(poenali auxilio)救い出されるという結果になる」(『神の国』二二・二二・三)。これは「暗い絵」の中で、治療や医薬という、それ自体としては明るい要素を取り上げながらも、治療

や医薬自身の持つ苦痛の一面を、ラテン語の響きもそろえつつ、暗く描いたものであろう。複雑なことに、「治療の数々（adiumenta）や医薬の数々（medicamenta）」については、「医薬の数々（medicamenta）や治療の数々（adiumenta）」として、順序を変えてではあるが、後には、「明るい絵」の中で、「可死的な健康（salus mortalis）［＝人間たちの健康］を守り、回復させるため」のものとして、十分な光が当てられている（『神の国』二二・二四・三）。つまり、同じ「治療の数々（adiumenta）や医薬の数々（medicamenta）」が、初めは「暗い絵」の中で、次に「明るい絵」の中で、暗い色彩と明るい色彩とで描き分けられているのである。

「医薬」と「毒薬」とは表裏一体であるからだろう。右の引用文は、さらにまた、左記と連関している。

すなわち、「毒の数々」uenena はかならずしも明暗に描き分けられているわけではないが、その用法が注目される。「毒の数々」は、その本性上、「暗い絵」の中に登場すべきものと考えられるし、事実、登場しているが（『神の国』二二・二二・三）、何と「明るい絵」の中にも、文字通り毒気を効かすようにして、登場する（『神の国』二二・二四・三）のである。「非理性的な生き物（animantes irrationales）を捕まえたり、殺したり、飼ったりすることにおいて、いかなる、そして何と大きな業の数々を人間の産業活動は発見してきたことか。［理性的な］人間たち自身に対してさえも、これほど多くの（tot）毒薬の数々（uenena）を、これほど多くの（tot）武具の数々（arma）を、これほど多くの（tot）装置の数々（machinamenta）を、人間の産業活動は発見してきたのであるが。そして、そうかと思うと、可死的な健康（salus mortalis）［＝人間たちの健康］を守り、回復させるためにどんなに多くの医薬の数々（medicamenta）や治療の数々（adiumenta）を人間の産業活動は見つけ出してきたことか」。

右の引用文では、光から影、影から光への連環的な移行が認められる。

すなわち、「光から影」への連環としては、「非理性的な生き物を」と「［理性的な］人間たち自身に対してさえも」とが連関し、「影から光」への連環としては、「［理性的な］人間たち自身に対してさえも」と「可死的な健康［＝人間たちの健康］を守り」とが連環している。

（6）参照、「けれども、両者は、人類の、この、いわば、流れ（fluuius）と急流（torrens）において、合流している。すなわち、両親から引き継ぐ悪（malum）と、創造者によって割り当てられる善（bonum）とは」（『神の国』二二・二四・一）。

（7）初期著作『自由意思論』一・三・六において、「どこから私たちは悪しくなすのか」unde male faciamus と問う前に、「悪しくなすとは何か」quid sit male facere を論議しなければならないとされる。その問題への糸口として、まず malefacta の実例が Augustinus によって求められたとき、

Euodiusが挙げたのは、姦淫(adulteria)、殺人(homicidia)、冒瀆の行い（sacrilegia）の三例であった。

（8）参照、加藤信朗「アウグスティヌスの聖書解釈をめぐって――『神の国』からの視点」。この論文の中では、『神の国』一一・九から引用される。「悪にはいかなる本性もない。むしろ、善の喪失に悪の名が与えられる」（Mali enim nulla natura est; sed amissio boni mali nomen accepit.）。そして、こう述べられる。すなわち、「アウグスティヌスは悪魔の堕罪に神の国と地の国の分裂抗争の端緒を置く考え方に属する人ではなかったのだと思う」と。

『神の国』一二一・二二一―二四においては、daemonesは二二・二二一・三に、またdiabolusは二二一・二四・一に、いわばその横顔を見せる。

（9）「衣服を縫ったり、建物を建てたりする技芸において、人間の産業活動（industria humana）は、なんと驚くべき（mirabilia）、なんと驚嘆すべき（stupenda）業の数々（opera）にまで到達したであろうか。農業（agricultura）や航海術（nauigatio）において、人間の産業活動はどこまで進歩したであろうか。ありとあらゆる種類の器の造形（fabricatio）において、器に彫られた彫像（statuae）や絵柄（picturae）の多様性にもよりつつ、人間の産業活動はいかなる業の数々を考案し、達成してきたことか。……非理性的な生き物（animantes inrationales）を捕まえたり、殺したり、飼ったりすることにおいて、いかなる、そして何と大きな業の数々を人間の産業活動は発見してきたことか。[理性的な]人間たち自身に対してさえも、これほど多くの（tot）毒薬の数々（uenena）を、これほど多くの（tot）武具の数々（arma）を、これほど多くの（tot）装置の数々（machinamenta）を、人間の産業活動は発見してきたのであるが。そして、そうかと思うと、可死的な健康（salus mortalis）[＝人間たちの健康]を守り、回復させるためにどんなに多くの医薬の数々（medicamenta）や治療の数々（adiumenta）を人間の産業活動は見つけ出してきたことか。……思いを知らせたり、説得したりするために、何と多数の、何と多様な記号（signa）が見出されたことか。その中では、言葉（uerba）と文字（litterae）とが傑出した位置を占めている。精神を魅了するために、いかなる雄弁の文飾が見出され、詩歌において、何と豊かな多様性が見出されたことか。耳に心地よい音を発するために、どんなに多くの（quot）楽器が考案され、いかなる歌の韻律が考案されてきたことか。……ことに、もしも私たちが、かいつまんで、すべて[の人間の産業活動]を積み上げようとはせずに、その一々において仔細に語ろうとするなら、一体だれが言い表せ（eloqui）ようか。最後に、自分たちの迷妄の数々（errores）と虚偽の数々（falsitates）とを弁論することにおいてさえ、哲学者たち（philosophi）と異端者たち（haeretici）とはいかに大きな天賦の才の数々（ingenia）をきらめかせるものであるのかを、一体だれが十分に評価できようか。」（『神の国』

二二・二四・三)。

(10) すなわち、【明るい絵の中の列挙Ⅰ】では、「これほど大きな自然本性(natura)の造り主(conditor)は真にして(uerus)至高の(summus)神である」(『神の国』二二・二四・三)。【明るい絵(の中の列挙Ⅱ)】では、「これほど大きな(tantus)創造主(Creator)のどれほど大きな(quanta)摂理(prouidentia)が現われていることだろう。」(『神の国』二二・二四・四)。そしてこの【明るい絵の中の列挙Ⅲ】でも、「今や、被造物(creatura)のその他の美しさ(pulchritudo)と有用性(utilitas)については」。